

馬鹿への教育

私たちはみな生まれたては馬鹿である。だから問題は、私たちがそれから何を習いおぼえたか、どれほど覚える力があつたかということである。遺伝するのはできあがつたものではなく、能力だけであつて、乳飲み児を見ただけではこれはわからない。生まれてから後に身についたものはもともと遺伝しないのである。

こんなことをいうと、良い子の親となつた幸福な母、年若い父は腹をたてるだろうが、赤ちゃんは精神活動という点から見るとまったくの白痴である。もちろん永久に白痴で終わる運命を持っていない赤ちゃんたちは、日一日といろいろな能力をつくり出し、こうしてごく徐々にではあるが知恵づき、ホモ・サピエンス、霊長類と呼ばれる人類の一員となつていく。かしこさや馬鹿の度合をはかり、同じ年齢の子供の成績を比べてみると、これははつきりする。そこで、たくさんのこういう比較研究や報告が行われ、その結果一定の年齢の子供は平均どれほどの知能活動ができるかがわかつた。子供だけでなく、大人も、こうして経験的に決めた標準に照らして検査ができる。このような知能検査、すなわち馬鹿さ加減の決め方が正しいかどうかは、調べる人の熟練と、検査の数とで決まる。

学校の成績簿をあけてみると、別に大げさな知能テストをしなくても、その子の頭脳の限度はすぐわかる。そこで何かよい救い道はないだろうかというのが、人の子の親、世の教育者たちの切実な願いである。ちよつと露骨だが、齒に衣を着せないことで有名なベルリンのことわざに「馬鹿は一生、くすりは無用」というのがあるが、果たしてこの通りだろうか？こんなに医学が進歩したのに馬鹿につけるくすりはまだできないものだろうか？グルタミン酸というような、効き目の非常にあやしいくすりがまたたく間に普及した事実は、馬鹿がどれほど広がっているか、またそれに悩む人びとがどれほど多いかを雄弁に物語っている。私自身もこれをためしてみたが、これをのませると鈍感な子が興奮しやすくなり、したがって活発に動き始めることが多い。親というものは自分の子供をひいき目に見るものだから、これだけでもう賢くなりはじめた、と大喜びする。だが精神科医の立場から見れば、くすりの効き目で、おとなしい馬鹿がさわがしい馬鹿にかわつただけで、このためにかえつて家庭生活をかき乱すようになることもある。

素質的な知恵おくれの子を育てるには、都会がよいか田舎がよいかはむづかしい問題である。田舎の生活では、馬鹿な子供は主に肉体労働や運動がや

りやすい。しかし大都会では専門の教師があつて、最上の教育効果がある見込みがある。

知恵のおくれた子供をひとまとめにすると、授業能率があがるだけではない、これによつて小学校の負担が非常に軽くなる。だいたい小学校の授業の進め方は船団護送の原則に従う。護送船団は、一番速力の遅い船も見殺しにできないから、その最後尾の船に合わせて進む。学級でもこの通りで、教師は一番できの悪い生徒、つまり訓練に一番手のかかる子供を置き去りにしないように、こうした方法をとる。

クラスで一番できない生徒が中ぐらゐの知能素質者である（それ以下の者は特殊なクラスにまわす）場合には、いちばんよくできる子に高い要求を出すと、それに引きずられて中位の者までがよい成績をあげるようになる。これが本当の教育指導というもので、こうして知能活動の水準が根本的に高められる。一方特殊教育へ振り向けられた者も、馬鹿ながらに何かできることがないかを十分に調べてもらえる。理屈はこの通りだが、実際はそううまくいかない。いちばんまずいのは偏見である。「私の子は白痴学校なんかへやるものか！」と、たいていの頑固な親たちは怒鳴りつける。そうして「お利口屋さん」の子供たちまでが「馬鹿学校」に通っている精神薄弱児をなぶり者あつかいにする。（一五七二字、引用にあつて一部表現と表記を改めた）

ホルスト・ガイヤー『馬鹿について』（創元社、一九五七）より